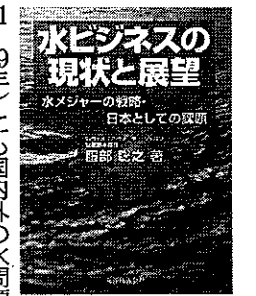


読書

SUNDAY NIKKEI

今を 読み解く

東京大学教授 沖 大幹



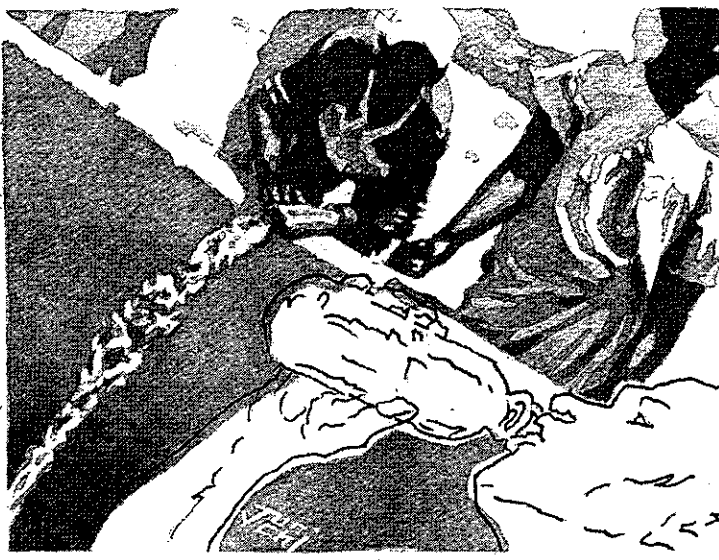
「電」出版開「中抜」作品を「能な現」本づく者にも「者」を問「星」募集「イッタ」目を集「新出版」シニア「補佐す

水は天下の回りものだ。雨が降って川となり、海や地面から蒸発して再び再び雨となる。水は地球表層を循環し続けている。お金と同じで、有り余っているところにはたくさんあるが、恵まれない人には充分には行き渡らない。それは、恵まれない人が乾いた大地に住んでいるからではなく、インフラ整備が貧弱だと、安定して利用できる安全な水の量は極めて限られるからである。

拡大する水ビジネス

●官民一体で推進 これに対し経済産業省は今年4月に「水ビジネス国際展開研究会報告書」をまとめた。その中で2025年には30兆円あまりに成長すると見込まれる民間による世界の上下水道事業のうち6%、1.8兆円市場を日本企業が獲得することを目指すとしている。こうした動きは首相直轄の国家戦略プロジェクト委員会におけるインフラ輸出の枠組みに取り込まれ、官民一体となって推進される見込みである。

洋経済新報社・10年)がよくまとまっている。橋本淳司著『7億人の水』(日本経済新聞出版社・同)ではより平易に国内外の水問題と絡めて水ビジネスが紹介されている。吉村和哉著『水ビジネス』(角川oneテーマ



新興国では人口爆発や都市への人口集中などで水の需要が増えている。イラスト・よしおか じゅんいち

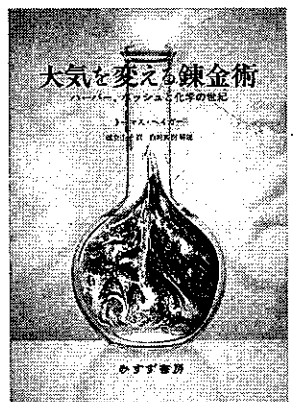
安定供給の構築、課題

21・09年)にも国内外の水問題とその解決へ向けた取り組みがトピック的に網羅されている。服部聡之氏はこうした水ビジネスをめぐる日本の状況を『水ビジネスの現状と展望』(丸善・10年)の冒頭で「モノづくりにかけては精通しているが、本格的なブルーをしたことがない一流のバット職人達が、ワールドベースボール・クラシックへの出場をかけて結果したような水ビジネスに参入するような状況」と表現している。服部氏は「気骨」を持つことである」と

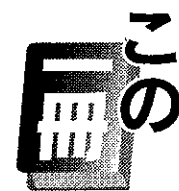
「電」出版開「中抜」作品を「能な現」本づく者にも「者」を問「星」募集「イッタ」目を集「新出版」シニア「補佐す

大気を変える錬金術

トーマス・ハイガー著



(渡会幸子訳、みすず書房・3400円) 著者は米国の医化学系シヤナリスト。医微生物学と免疫学を修めたのち、米国立癌研究所の広報担当をへてフリーランスライターになった。



れ、最後は二人とも決して幸せとはいえない生の終わり方をしている。彼らの作り出したアンモニアもまた、その量が膨大であるがために環境問題をひきおこしていることに著者は注意を喚起している。今後、バイオガソリンが大量に生産されるようになれば、これまで以上に大量のアンモニアが合成され、地球にはき出されるだろう。南米で発見された自然の産物の硝石を爆薬と肥料のために奪い合った歴史からはじまるこの著作は、歴史としても興味深い。問題は決して過去のことではなく、

窒素にまつわる「光と影」描いた物語

空気中の窒素ガスを私達は毎日吸い込み、ただ吐きだしている。空気の8割を占める窒素は毒でも薬でもなく、何の働きもしていない。しかし、その窒素がアンモニアに変化するなどで肥料となり、食べ物となって人類の生存を支えていることを、そして、資源に恵まれなかったがために、ドイツが窒素ガスからのアンモニア合成に挑み、それに成功し、ドイツ化学産業の黄金時代を築き、それが、ナチスの活動を支えた歴史を、その技術を生み出した二人の技術者ハーバーとボッシュの壮絶な人生を軸にして、この本は描ききっている。評者は、かつて化学を専門にしていたので、ハーバー・ボッシュ

法についても相当な知識を持ち合わせていた筈だが、この本を読むまで、アンモニア合成がなければ、地球上の人口の半分以上が飢えてしまうことを考えたことがなかった。この物語は、まず、窒素の物語なのだ。超人的な努力でアンモニア合成を

成功させ、人類に福音をもたらした二人だが、一方で、ハーバーは毒ガスの製造と使用にも携わり、ボッシュはIGファルベンという巨大な化学トラスットの取締役会長としてナチスの戦争政策に積極的に協力した。しかし、やがてヒトラーに追わ

しく、躍動感のある著作だが、ひとつだけ残念なのは、日本語タイトルの意味が理解しにくいことである。例えば、原題に沿って「空気を人類のパンに変える錬金術」というようなタイトルにすることを評者は提案したい。

【評】産業技術総合研究所 安全科学研究部門長 中西 準子